

日本ケベック学会の設立

小畑 精和

日本ケベック学会会長

2008年10月4日に、「ケベックを中心として、フランコフォニーに関する学術研究及び芸術文化交流の振興と推進」を目的として、日本ケベック学会が設立された。ケベック州文化・コミュニケーション・女性の地位担当大臣クリスティーヌ・サンピエール氏、ケベック州政府在日事務所代表スザンヌ・エティエ氏、在日カナダ公使ドナルド・ボビアッシュ氏、ハン・デキュン韓国ケベック学会会長らを招いて、明治大学リバティーホールで開催された設立大会には100名以上の参加者が集まり大盛況であった。

総会では、学会規約が承認され、役員が選出された。また、設立を記念して「ケベックのおもしろさ——4つの視点から」と題したシンポジウムが立花英裕会員の司会により開かれた。竹中豊会員が「〈地域研究〉の視点から」、矢頭典枝会員が「〈フランス語社会〉の視点から」、安田敬会員が「〈ダンス芸術〉の視点から」、小畑が「〈文化論〉の視点から」、それぞれケベックの魅力について語り、ケベック研究の重要性と可能性を論じた。

1967年のモントリオール万博や1976年のオリンピックを通して日本でも知られるようになったケベックが、研究者の関心を惹くことになった大きなきっかけは、1980年の州民投票だろう。そこでは、ケベックが主権を持って他のカナダと新たな連邦を組む「主権連合構想」が問われ、「ケベックが独立するのか」と衆目を集めた。日本でも、その背景についての説明が求められ、1980年代にケベックを研究してみようとする者が増え始めたと考えられる。1987年に刊行された日本カナダ学会創立10周年記念論文集『カナダ研究の諸問題』にも「比較法学的見地から見たケベック民法」（大島俊之）、「19世紀モントリオール産業企業家の軌跡：ヒュー・アレン卿の生涯」（豊原治郎）、「カナダ現代劇作家とドラマトゥルギーの問題」（南良成）といった論文が見られる。1989年には『現代ケベック：北米のフランス系文化』（長

部重康ほか、勁草書房)が出版されている。

ちなみに、1973年には『フランス系カナダ問題の研究：少数民族問題とカナダ連邦の試練』（伊藤勝美、成文堂）が、1978年にはクセジュ文庫『フランス系カナダ』（ラウル・ブランシヤール著；滑川明彦訳、白水社）が出版されているが、どちらのタイトルにも「ケベック」が用いられていない点に注目しておきたい。ケベック州自体で、「フランス系カナダ」に代わって「ケベック」という呼称が好んで使われるようになったのは、1960年代の「静かな革命」期においてであった。日本ではおよそ20年遅れで新たなアイデンティティが認知されるようになったと言えよう。

1990年代に入ると、文学・文化、歴史、政治・経済、教育など様々な分野でケベックをフィールドとする研究者が活躍し始める。そうした活動は、主に、日本カナダ学会、日本カナダ文学会、日本フランス語フランス文学会、日本フランス語教育学会で発表・報告されてきたが、それらはそれぞれの学会で個別になされるにとどまり、相互に関連することは少なかった。

1990年代から2000年代にかけて、わが国でも徐々に研究者相互の交流も始まりだし、また、ラララ・ヒューマンステップスなどのダンス、ロベール・ルパージュの演劇、シルク・ドゥ・ソレイユといったケベックのパフォーミング・アーツが新たな注目を集めるようになった。研究者間の連携をさらに深め、新たな研究領域も視野に入れていく必要性を感じるものも増えてきた。こうした状況下、昨春、ケベック州政府在日事務所の支援を受けて、竹中豊、立花英裕、小畑精和の三名が発起人となって、日本ケベック学会の設立を呼びかけることとなった。ありがたいことにおよそ70名の賛同者をえて、7月には17名の研究者からなる「設立準備委員会」が発足し、3回の準備会を開いて、設立大会に至ることができた。なお、2009年4月30日現在会員数は61名である。

ケベック研究は若い分野で、研究者の層もまだまだ薄い。しかし、1960年代の「静かな革命」による急速な近代化、独自の経済、言語政策、アイデンティティ、社会保障制度、移民政策・文化政策、社会を反映する文学、近年盛んなパフォーミング・アーツなどなど、ケベックは学問的好奇心をくすぐるテーマに満ちている。歴史が浅いだけに、未開拓の部分も多い。研究者間の活発な交流により、学際的な研究の発展が望まれる。また、若手研究者の活躍も期待される。さらに、AIEQ (Association internationale des études québécoises) や韓国ケベック学会などの国外の学会とも連携していく必要が

あろう。

最後に、本学会設立を支援していただいたケベック州政府、特に、在日事務所代表のスザンヌ・エティエ氏と、文化・教育担当官の天野偉巳氏に厚く御礼申し上げます。

また、フランス語版を見直してくれた琉球大学のソフィー・パルヴァードー准教授に感謝申し上げます。